

『赤い鳥』 童話と鈴木三重吉による改変

遠山 光嗣

『赤い鳥』は、昭和四年三月から一年九か月の休刊期間を挟んで、前期『赤い鳥』と後期『赤い鳥』に分かれるが、前期を代表する童話が芥川龍之介の「蜘蛛の糸」なら、後期を代表する童話は新美南吉の「ごん狐」だろう。

芥川龍之介と新美南吉。両者の違いは、『赤い鳥』の前期と後期の性格の違いを象徴している。前期では文壇作家が多く動員され、後期は新人や投稿者の作品が中心だった。『赤い鳥』は、夏目漱石門下の鈴木三重吉が、会員募集のプリントに「童話と童謡を創作する 最初の文学運動」と謳い、「現文壇の主要なる作家であり、又文章家としても現代第一流の名手として権威ある多数名家の賛同」(同)を得て、大正七年に創刊した。自分が頼めば誰でも童話を書いてくれると三重吉が自慢した通り、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」「杜子春」をはじめ、有島武郎の「一房の葡萄」、島崎藤村の「二人の兄弟」、菊池寛の「一郎次、次郎次、三郎次」など、著名作家から多くの作品が提供された。

文壇作家に童話を書かせ、これらの佳作を世に出したことは三重吉の功績といえる。ただ、童話を専らに書く作家が小川未明を除くとほとんどいなかった当時、いくら小説で名を成した作家とはいえ、子どものための読み物を書くことには不慣れで、従来「お伽噺」を脱して新しい児童文学を創造するという意識も三重吉ほどにはなかった。

いきおい三重吉は、彼らの作品に手を入れざるを得なかった。というより、むしろそのことに情熱を傾けた。龍之介の「蜘蛛の糸」にも朱が入られたことはよく知られている。ただ、龍之介の場合は、「まづい所は遠慮なく筆削して貰ふやうに鈴木さんにも頼んで置きました」(大七・五・一六)と自ら添削を頼んだことを、『赤い鳥』の編集に携わっていた小島政二郎への手紙に書いている。「どれをよんでも私のよりうまいやうな気がします」「小供の心もちがうまくのみこめてゐる」(大七・六・一八 小島宛)とも書いており、こと子ども向けの作品に関しては、三重